

知多地方の消えた獅子舞

松 下 孜

日本福祉大学 子ども発達学部

Disappeared Shishimai in Chita area

Tsutomu MATSUSHITA

Faculty of Child Development, Nihon Fukushi University

Key Words：獅子舞，雨乞い，お祭り，獅子芝居（嫁獅子）

はじめに

獅子舞は、日本各地で現在も数多く行われている。知多地方も、知多市・朝倉の梯子獅子をはじめ、半田市・向山の神樂獅子、同・成岩神社の大獅子小獅子の舞、同・板山の獅子神楽・嫁獅子、東浦町・藤江神社のだんつく（獅子舞）などがあり、祭の折に披露され、数多くの観客を楽しませている。

その一方、知多地方では、かつてはもっともっと数多くの獅子舞が行われており、村人の多くが獅子舞を楽しみ、獅子舞の技を競っていたのである。今では、獅子舞が行われていたことも、それを楽しんだことも忘れ去られて、数多くの獅子舞が姿を消していったのである。

これから、姿を消した獅子舞が、どこでどれくらい行われていたかを残された資料や史料から見つけ出し、紹介していくことにする。その目的は、次の二つである。

獅子舞が行われていた事実を資料や史料をもとに明らかにし、獅子舞が盛んであった理由を追究する。

盛んであった獅子舞が、なぜ姿を消したのかを推察し、時代の変化の中の民衆文化について考察する⁽¹⁾。

以下、知多半島の五市五町を順に追って、姿を消した獅子舞について追及していくことにする。

姿を消した獅子舞

1 知多市域の獅子舞

寺本四力村の獅子舞⁽²⁾

寺本四力村でいつから獅子舞が行われるようになったのか明らかにする史料はない。ただ、八幡宮祭礼式の図（宝暦五年）の神輿渡御の行列の五番目に獅子があり、二人が獅子を運んでいる様子が描かれている（図1）。



『知多市誌 資料編三』（P125）より引用掲載

（図1）八幡宮祭礼式の図

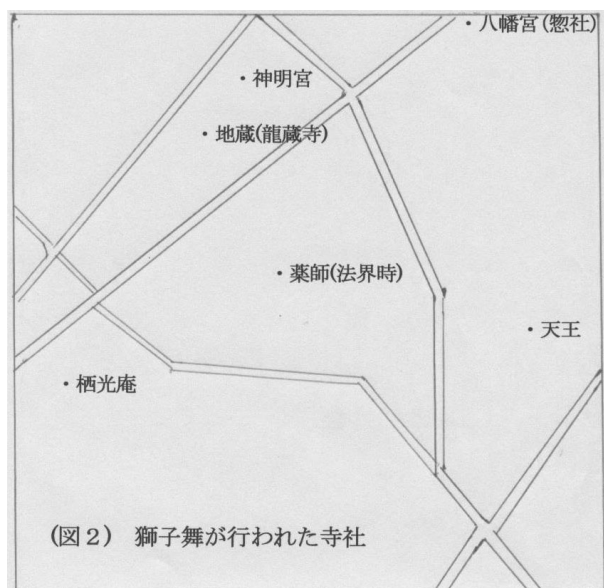
祭の渡御の獅子が獅子舞を演じたかどうかは不明だが、ただ歩いて運ぶだけとは考えられないので、道中になんらかの所作を行ったと考えられる。八幡宮は寺本四力村の惣社となっているので、寺本四力村の村方と獅子舞との関係を示す、今のところ最も古い資料である。

中島村庄屋の六兵衛が残した「文化十三年子四月 年代記」（以下「年代記」とする）（知多市歴史民俗博物館蔵）に次の記載がある。

文化十五年ニ文政元年とかわり申候

初、雨乞惣社江八月十日より十四日まで五日の間雨乞、先、初日惣社江参詣仕候、中の日者惣社江馬引、薬師馬拵、それより地藏様・天王様・八幡宮様・神明宮様・栖光庵様、十二日大雨ニ而皆大根まき申候、初、夫より雨降不申候、又廿二日より廿六日迄惣社江雨乞請奉懸ケ候、廿四日中の日ニ而惣社江たいこ持、参詣仕候、これも廿六日ニ而雨降申、夫よりもまだてりニ而御座候

九月朔日惣社江御礼、猪ニ而御礼仕答ニ而御座候、薬師ニ而そろい打込ニ致、薬師ニ而者小根之獅子舞申候、栖光庵ニ而者中嶋村獅子舞、神明宮ニ而者廻間村獅子舞申候、八幡宮ニ而者堀之内村獅子舞、天王ニ而者杉山獅子舞、地藏ニ而平井村獅子舞申候、初、地藏様ニ而四ヶ村で獅子式番舞等ニ相なり、若い者頭役人衆之前ニ而くじ引、其時平井村・中嶋村両村江くじ取獅子舞致候⁽³⁾



(図2) 獅子舞が行われた寺社

(図2) 獅子舞が行われた寺社

日照りに悩まされることの多かった知多半島では、雨乞いは何より大事な行事であり、田植えの時期や八月の大根の植え付けの時期には必ず行っている。この年も惣社（八幡宮）へ雨乞いを行ったり、馬（御馬塔）を薬師・地藏・天王・八幡宮・神明宮・栖光庵へ引き回し雨乞いを行ったりしている。さらに、八月廿四日には、惣社へ太鼓の打ち込みを行って雨乞いの参詣をしている。そのお陰か順調に雨が降り、雨乞いの願いがなかったので、九月朔日にそれぞれの場所で獅子舞を奉納して御礼をしたのである。そして、来年からも降雨があることを願ったのである。獅子舞を行ったのは、寺本四力村に加え、小根と杉山である。小根は中島村の枝郷、杉山は平井村の枝郷であるが、幕末になると独立性が強くなり、後の八幡地区の祭りでは、それぞれが独立して参加している。なお、小根は、漁師が多い浜小根と商家が多い中小根とに分かれた。当然ながら獅子舞は村の神事として行われるものなので、当日は村人の前で披露され多くの人々が観衆として獅子舞を楽しんだのである。寺本四力村の中に広く獅子舞が普及していたことが分かる。（図2）

「年代記」には、文政二年に、獅子のけいこが行なわれたことを記載している。

当村若イ衆獅子けいこ致候、六月朔日より九日迄惣若イ者毎日かゝり申候

獅子舞は、村の「若イ衆」が行うもので、稽古の日数は九日間におよんでいる。六月に稽古をしているのは、雨乞いの行事や夏祭りの神事に参加するための準備と考えられる。「年代記」には、八月の八幡宮の祭りでは、渡御先の天白社で毎年四力村の若イ衆が獅子舞を奉納していることも書かれている。このように、寺本四力村の獅子舞は、村祭りの神事や雨乞いの行事に深く関連して行われていたのである。

中嶋村の獅子舞は、高い演技を伝承していたようで、他村から招かれて獅子舞を演じている。六兵衛は、「六兵衛万覚書ニ」（『知多市誌 資料編四』P 444）に次のように書いている。以下は、弘化2年のできごとである。

三月ニ相成候而内海前野小平治様、金毘羅祭礼八日九日十日三日之間被遊候思召ニ而、中嶋若イ者ニ而獅子舞致呉候様御頼ニ付、若イ者相談仕候、内海へ可参相談相成候、初先方様ニ而獅子道具等無之候付、

村方之道具持参仕候様御頼御座候ニ付、内海より八拾石船ニ而出迎ひ参り候、其節やたい・長持・諸入用道具、不残船ニ而送り申候、船ニ六兵衛次男市九郎上乘ニ参り申候が三月四日ニ御座候、七日之日ニ者若イ者獅子役人之者拾人斗、外ニ茂拾人斗参り、初内海へ参り候而小家掛り見請申候処、中々大芝居之通之小家懸リニ而、大坂江者人参りあやつり人形浄瑠璃咄か、八日朝より六ツ時頃より半蔵方ニ而獅子太鼓打初メ候得者、小家之内ニ而寄太鼓打、日之出より中嶋若イ者高張出、右場所へ打はやしニ而参候也、正五ツ時頃より若イ者獅子式番相勤候得者あやつり人形浄瑠璃三段はなしが誠ニ大くんじゅう也、八日九日十日、十一日同月十二日ニ帰り候、初内海より者船ニ而送り被下、当寺本小根浦へ日暮ニ着、夫より中嶋村若イ者浜江迎ひ参り候、内海ニ居合候節者式拾人斗宿を取被下候而、毎日小家中ニ而者高座ニ而中嶋村若イ者と高札御座候、誠ニ高座ニ而者、重組ニ而、板見（伊丹）之上酒、重組ニ者伊勢之大板其外時之名魚ハ無残御出被遊候而、宿代之儀も先様より之御払居、村方へ歸り之節者、金三両頂戴いたし、難有仕合之儀も半蔵様之御陰と村中一統悦び、村方引取村中へ酒振（舞）ひ仕候、其節小平治様より目印ニ高張壱張頂戴申候

内海（南知多町）の前野小平治は、廻船多数を所有する内海の東端村きつての豪商で、尾張藩の御用金を調達したり御勝手方御用達になったりと尾張藩の財政にも関与するほどの実力者である。その実力者からの獅子舞の依頼であるから、おそらく張り切って依頼に応じたものと思われる。



『知多市誌 資料編三』（P130）より引用掲載
（図3）練り歩く屋形（中小根）

『南知多町誌 本文編』などによれば、内海地域に獅子舞があったという記載がない。おそらく、幕末にも獅子舞は行われていなかったのであろう。そこで中島村へ獅子舞出演の依頼をしたのである。中島村が獅子舞のために運び込んだ道具は「やたい・長持・諸入用道具」である。「やたい」というのは寺本の人々が呼んだ言い方で、正式には「獅子神楽屋形」である。中島村の「やたい（屋台）」は、豪華な飾り付けを有する立派なもので、幕末にはすでに造られていた。内海へは、この豪華な「やたい」を持ち込んだのである。「やたい」は、お祭りには四人の若者が担ぎ、笛と太鼓で囃しながら練り歩くのである。おそらく、「日之出より中嶋若イ者高張出、右場所へ打はやしニ而参候也、」とあるのは、この「やたい」を囃子をそえて担いで行ったのであろう。獅子役のほかに拾人が参加したのは、この重い「やたい」を変えるがわる交代で担ぐためであった。（図3）

では、獅子舞はどのように行われたのであろうか。それは「正五ツ時頃より若イ者獅子式番相勤候得者あやつり人形浄瑠璃三段はなしが誠ニ大くんじゅう也」とある。獅子舞が発展して、歌舞伎の演目を獅子頭をつけて演じる獅子芝居がある。現在半田市板山で行われている「嫁獅子」がこれにあたる。板山では、「段ものが上演され、芝居狂言の義太夫に合わせて傾城阿波鳴門や朝顔日記、神霊矢口の渡し、忠臣蔵三段目、七段目が演じられる。」（『半田市誌 本文編』P1036）とあり、現在も「段もの」が演じられているのである。中島村の獅子舞は、この「段もの」を演じ、好評を得たのである。

人形浄瑠璃や歌舞伎の演目が、村芝居やお祭りの山車で演じられることはよく知られている。本当は、このことは日本の民衆文化を考える上でとても重要なことといわなければならない。つまり、観客である村人は、当時、江戸・大阪・京都などで行われている最高水準の演劇を鑑賞していたのである。村芝居や獅子芝居では、人形浄瑠璃や歌舞伎を変化させてはいるものの、よく知られた名場面が演じられることが多く、村人は十分に歌舞伎や浄瑠璃の文化を味わっていたのである。村人の文化の水準は、都市の人々と遜色ないのである。「忠臣蔵」であろうが「傾城阿波鳴門」であろうが、よく知っていたのである。獅子芝居も文化の伝達という面から考えると、大きな役割を担っていたといえよう。

獅子役人も拾人である。これは、獅子を演じる人・笛を吹く人・太鼓をたたく人・義太夫を唄う人などである



(図4) 屋形に納められた獅子頭 (旧・中嶋村)

う。先の人数と合わせて二十人ほどが、伊丹の酒・各種の魚などで歓待されている。宿の費用はすべて相手方の村がもち、帰る時には、金三両も与えられている。また、前野小平治よりは高張（提灯）も頂いている。よほど、中嶋村の獅子舞（獅子芝居）がすぐれていたことを示しているといえよう。前野小平治は、自分の村の金毘羅祭礼に、獅子舞を招くに際して、どこの獅子舞を招待するかをしっかりと見物して中嶋村と決定したに違いない。もし、自分が招待した獅子舞がまずいものであったならば、自分も大恥をかくことになり、村方も迷惑をこうむることになる。中嶋村の獅子舞が大成功を納めたということは、前野小平治の獅子舞に対する観照眼がすぐれていたことを示している。獅子舞が獅子芝居を演じることにより、技が高度化し、高度化した技を村人の前で演技し、村人を楽しませることも獅子舞がもつ大きな意義であった。なお、平井村と中嶋村の屋形には、現在も獅子頭が納められている。（図4）

しかし、これほど盛んであった獅子舞も、明治に入ると急速に姿を消すことになった。その理由を示す直接の史料は管見の範囲では見つけることができなかった。そこで、さきの史料をもとに姿を消した理由を推定してみることにする。

ア 獅子舞は、雨乞いやお祭りの折に演じられていた。

先に見たように獅子舞は、単純に舞われているものではなく、獅子芝居として、総合演劇のような水準に達していた。それだけに伝承しようとする、何日にもわたる稽古が必要となる。よほどしっかりした伝承組織や伝承意欲を持たないと失われていくこ

とになる。

イ 獅子芝居は、浄瑠璃や歌舞伎の脚本がもとになっている。明治に入ると外国の文化が普及して浄瑠璃や歌舞伎の人气が衰えてきた。その影響をうけて観客（村人）の興味が少しずつ冷めていき、獅子芝居の人气も衰えることとなった。

ウ 「やたい」がりっぱで豪華なので、祭の主体が「やたい」での練り歩きとなった。また、「やたい」がない地域は、大太鼓を担いで練り歩きをすることに変化した。必ずしも獅子舞に頼らなくても、祭を楽しむ方法を見つけ出したのである。

おそらく、このようなことが獅子舞が姿を消した理由ではないであろうか。

佐布里（村）の獅子舞

佐布里（現・知多市佐布里）に獅子舞が行われていたことを知る人は、現在ではほとんどいないといつてよいであろう。なぜなら、今回、佐布里在住の昭和10～20年代の佐布里を知る人たちに佐布里の獅子舞について尋ねると、全く見たことがないという回答を得た。昭和20年代には、完全に姿を消しているのである。しかし、佐布里には、しっかりと獅子舞があったのである。それは、つぎの文章に書かれている。

97 佐布里の獅子舞

郷土芸能として、この佐布里に獅子舞があった。田植えの仕事が終わると、囃子方、獅子頭、唄方等、数人で組を作り、毎日のように獅子舞のけいこをした。そのあげく、あちこちの村々の氏神様の祭礼に招かれて出向いたということだ。

私の祖父、彦太郎もその組のひとりであった。時には、二、三日泊りがけで、その土地の人々に教えに出向いてもいた。

ある年、半田の南の成岩の氏神様の祭の余興に招かれた。所が、出向いた者たちの意見があわず、一方はもろくわ（師鍬）＝くろうと側、一方は、佐布里の門人＝しろうと側。両者が争って互に譲らず、とうとう観衆を真中にして両方に舞台を設けて技をはりあうことになった。

いよいよ、両方の舞台で出演。そして、彦太郎（唄）、阿知波牧助（小役）、鰐部鐵次郎（獅子頭）の出番となった。熱演している間に、先方の舞台の

方に近い人まで、くるとこちらの舞台の方に向き
をかえて、われわれの方の演技に見入ってくれた。
演技が終わると一斉に、割れるような大拍手。遂に
われわれしろうとの側の方が相手側に勝った次第。
わしの一生涯を通して、こんなにうれしかったこと
はなかったと、じいさんは話してくれた。

私が小さい頃、中島の平松金理さんや、平松庄次
郎さん、久野庄太郎さん方が、雨の日や、夜に獅子
唄の練習に来られたことを覚えている。

『八幡の語り草』（「八幡の語り草」編集委員会
発行）より、「97 佐布里の獅子舞」の全文引用

『八幡の語り草』は、佐布里から12人参加して執筆し
ているが、誰が執筆したかが書かれていないので、「97
佐布里の獅子舞」の執筆者がわからなかった。文章の
中にある「久野庄太郎さん」は、明治33年、現・知多
市八幡字中嶋に生まれ、先般長寿をまっとうされご逝去
されたが、愛知用水の生みの親とも言われる名士である。
「久野庄太郎さん」が獅子唄の練習に通ったのは、年齢
から考えて大正末から昭和の初めにかけてのことと推定
される。さきにみたように中嶋村は、幕末にはすぐれた
獅子舞を伝承していたのであるが、「久野庄太郎さん」
の若かった頃にはすでに完全に姿を消していたことが分
かる。獅子唄がどのような唄であったか、今では知るよ
しもないが、中嶋からかなり距離のある佐布里に通い練
習するほどの魅力のあった唄なのであろう。

「半田の南の成岩の氏神様の祭」の獅子舞のエピソード
は、獅子舞が各地で技を競い合う様子が窺える内容で
ある。「彦太郎（唄）、阿知波牧助（小役）、鰐部鐵次郎
（獅子頭）」とあるので、三人で毎日技を磨いていたので
あろう。

しかし、このすぐれた獅子舞も、継承者が出なかった
ことや戦時色が濃くなるなどの影響であろうか、第二次
世界大戦前後には完全に姿を消し、今ではほとんど知る
人もなくなったのである。

松原村（知多市新舞子）と森村（現・知多市日長）
の獅子舞

松原村では、白山権現社の祭礼を行うため、次の史料
を作成している。

乍恐御達申上候御事

一しんかく車 一輛

一獅子 一頭

右八当村白山権現祭礼、当月十一日相勤申候間、依
之御達奉申上候、以上

亥六月

松原村庄屋

茂兵衛

小山清次郎様

御陣屋

（知多市・小島家文書）

天保十年に白山権現社の祭りに「獅子 一頭」を記し
ているのは、獅子舞を奉納することを意味しているとい
えよう。獅子舞は村の神社の神事となっているのである。
現在の白山神社の祭りには、獅子舞を奉納することはない。
いつしか姿を消したのである。

森村も獅子舞が行われていた。

此年神よし御着ニ而祭儀八……（中略）……森村御
馬頭四駄・しゝ（後略）

（知多市・小島家文書）

この史料は明和七年のもので、松原村に津島神社の神
輦が流着したのでお祭り騒ぎがあり、森村では御馬頭四
駄としゝ（獅子）を出したというものである。森村に獅
子舞があったことが分かる。しかし、現在では、全く姿
を消している。

2 半田市域の獅子舞

最初に述べたように、現・半田市域には「向山の神樂
獅子、成岩神社の大獅子小獅子の舞、板山の獅子神楽・
嫁獅子」が残されている。現在は「向山の神樂獅子」が
残されているが、その地域では江戸時代には、もっと多
くの地域で行われていたのである。次の史料をみてみよ
う。

獅子入組之儀ニ付組々江尋問之事

一向山獅子之儀は、中組獅子より古獅子ニて、全体祭
礼獅子杯与申説も有之候得共、仮令祭礼獅子ニ而も
先年本郷ニ獅子無之以前より、向山ニ獅子有之故、
雨乞諫御遷宮其外御神事等之節、本郷より御招請以

来相勤来候様子ニ被相考申候、其後中組ニ獅子出来以来二頭を以相勤来候様子ニ相見へ申候、夫より数拾年之後南組・北組同時ニ獅子出来、夫より数年之内新井ニ獅子、飯森ニ打拍子は又同時ニ出来致、唯今ニ而は獅子五頭ニ打拍子一組以上六組、平地新田獅子一頭都合七組相定り、御遷宮并雨乞御祭礼之節相勤来り候（以下略）

（『半田市誌 資料編』P 276）より引用、読点は筆者が適宜補った。

この史料は、年号の記載がないのではっきりしないが、文化元年（1804）くらいに書かれた文書といえる。それは「（冊子裏）文化元年以甲子八月和睦出来致ス」とあることから推定できる。この史料により、向山獅子が最初にでき、次に中組にでき、続いて南組・北組同時にでき、さらに新井に獅子・飯森に打拍子ができ、そこに平地新田の獅子が加わり、獅子六組・打拍子一組ができたのである。ここでも獅子舞は、雨乞いや神社の祭礼の神事として奉納されている。獅子舞が行われている範囲が次第に大きく広がっていくことが知られる。しかし、この地域の獅子舞も現在では、向山の獅子舞だけが残し、他の獅子舞は姿を消したのである。

3 東浦町域の獅子舞

東浦町には、藤江村（東浦町藤江）の藤江神社のだんつく（獅子舞）があり、地域の人々に親しまれている。しかし、緒川村（東浦町緒川）や村木村（東浦町森岡）にも獅子舞があったのである。次の史料が残されている。

2 - 56 乍恐御達申上候御事（天王祭り）

乍恐御達申上候御事

当月廿日・廿一日両日、当村天王祭りニ御座候処、常例獅子三頭・笹馬九疋・花車等差出候へ共、去年相休ミ候付、当年八右の通り差出、相勤申度奉存候、并天王立符、毎年当十五日津島より相迎候処、右十五日夜より廿一日夜迄、七夜の間、毎夜笛太鼓ニて獅子舞仕、相いさめ候事ニ御座候処、此節末々鳴物停止中に付、例年の通為取計不苦候義ニ御座候哉、是亦御伺旁御達申上候、已上

亥六月

緒川村庄屋

利兵衛

鳴海

御陣屋

『新編 東浦町誌 資料編 4 近世』「2 - 56」より引用

緒川村では、天王祭に獅子三頭が笹馬・花車とともに奉納されている。天王祭は期間が長いことが特徴で、緒川村でも七日間お祭りしている。その毎夜、「笛太鼓ニて獅子舞仕」と獅子舞を奉納しているのである。獅子舞が盛んであったことが知られる。

『東浦町誌』の（「獅子舞」P 645）の項で次のように述べている。

獅子舞がいつごろからはじまったか不明であるが、天保十四年（一八四三）尾張藩主が知多巡覧で緒川村善導寺を本陣として宿泊の際、庄屋竹内孫右衛門が自家製の酒一樽と地元産物のドジョウかご献上するとともに、獅子舞いをご覧に入れたという記録（竹内大二所蔵の緒川古記録雑書）がある。明治三十年ごろまで緒川では若い衆の獅子舞いが盛んで、祭りのなどの余興として行われた。各町内に多数の嫁獅子の設備があったが、自分の気に入るものを個人用に私有する若者が多かったほどである。

森岡も「村木獅子」の名があるほどで、獅子頭をつけ鈴や房を持ち、笛太鼓に合わせて舞った。祭礼などはもちろん、他地方に巡業もしたが、後継者難などで大正末期に消滅した。

これによれば、緒川村では、各町内に嫁獅子の設備があり、明治三十年ごろまで若い衆の獅子舞が盛んであったことが知られる。「嫁獅子」とあるので、獅子芝居が演じられていたのである。森岡の「村木獅子」は他の地方に巡業するほどであったという。これらの獅子舞も大正末期に姿を消したのである。

4 美浜町域の獅子舞

『美浜町誌 本文編』の「第三節 芸能 獅子舞」には、次のようにある。

神前に舞いを奉納して神をなぐさめる神事は、すでに天の岩戸の物語として「古事記」にも出てくるころであるが、古布・矢梨・切山・河和・北方など

で行われてきた獅子舞がいつごろから始められたものかは明らかではない。(後略)

「古布・矢梨・切山・河和・北方」とあるのは、江戸時代の村の名前である。したがって、五力村で獅子舞が行われていたのである。現在も獅子舞を伝えているのは、古布の獅子舞である。この獅子舞は歌舞伎や浄瑠璃からの影響を受けた、獅子芝居を演じている。そのほかの獅子舞は姿を消している。

5 東海市域の獅子舞

加木屋村(東海市加木屋町)では、次のように横須賀陣屋へ願い出ている。

乍恐奉願上候御事

一獅子頭 式ツ

一馬 三疋

右は、来九日祭礼ニ付、前頭馬・獅子ニ而、例年之通執行仕度、奉願上候、尤御時節柄之義ニ付、諸事質素ニ取計可申候、右願之通、御聞濟被下置候ハ、難有仕合、可奉存候、以上

加木屋村庄屋

早川平右衛門

(文政8年) 西八月

松田庄太夫様

御陣屋

『東海市史 資料編 第二巻』「調宝記 77」より引用

加木屋村では、村の氏神である熊野神社の祭りに、「獅子頭 式ツ」つまり、二頭の獅子舞を奉納していたのである。どのような獅子舞であったかは不明であるが、今日では姿を消している。

横須賀村(東海市横須賀町)の諏訪神社では、祭の折に「獅子芝居 地元の有志で行う」(『横須賀町史』P 784)とあるので獅子芝居があったことが分かる。これも現在は姿を消している。

名和村(東海市名和町)の船津神社の祭りには、子供獅子が繰り出している。これはいつ始まったのか明らかなでないが、現在も行われている。『東海市 資料編 第六巻』「子供獅子」では、二枚の写真を付け、次のように伝えている。

子供獅子

毎年10月最初の日曜日に高張提灯を先頭に笛、太鼓奏楽の大人に続いて脊に祭と染め抜いた法被に鉢巻姿の子供たちが、船津神社に勢ぞろいし神事を済し、行列は上・下名和神社へ分れ参拝後、獅子面をかぶった子供と十数人の男女児等が、自分たちの町内を軒別に回り報謝を受ける行事で、彼等は最も楽しいお祭りといっている。最近竹を割ったバリンを持ったショウジョが加わりつつある。

写真の古いものは、昭和21年9月26日に写したという。ずいぶんながいこと続いている子供獅子なのである。

6 大府市域の獅子舞

『大府市誌 資料編 近世』「二八八 祭礼稽古の奉加帳」として、次の史料を掲載している。

明治三年
獅子稽古両日支度奉加
巳六月一日

獅子稽古致候、段者之儀お(を)申上候所、殿方様ニも御世話ながら御目ニ相当り候ハ、御読ミ可被下候、以上

一ノ谷熊賀井陣屋之段

伊賀越岡崎の段

栗の鳴門重兵衛住家の段

定四良 半三良

獅々 ■三良 笛 東三良

濱三良 竹太良

近三良

一例年之通天之(王)祭り之儀、御願申上候、以上
御祭礼 午ノ六月十日

明治元(年)

伊右衛門

御若御連中様

別所振舞覚

一振舞 文四朗

一白米三升 平左衛門

一同 三升 新右衛門

(中略)

一八刃式百文 小嶋長右衛門様

六月九日稽古揚げと申候、鳥渡書印し置申候
一五両壹分 六日稽古仕候
(中略)

(裏表紙)

追分村		兼三郎
		寛三郎
	半三郎	取持中 初四郎
若連中 惣代	光三郎	春三郎
	悦三郎	谷三郎
		光三郎

追分村(大府市追分町)の氏神は、藤井神社だが、境内社に津島神社があるので、天王祭りも行っただけであろう。天王祭りには獅子舞が奉納され、稽古が行われた。その稽古の奉加として、白米や金銭が届けられたのである。この獅子舞も「嫁獅子」系の獅子芝居なので、「段もの」が演じられた。稽古は、「六日稽古仕候」とある。この稽古の間にどれほどの金銭などが差し入れられたのであろうか。(表1)にまとめた。このように多額の奉加があったのである。獅子芝居を演じるとなるとこれくらいの出費が必要となるのである。こうした村方からの大きな援助のもとに獅子舞が存続していたといえよう。ここの獅子舞も姿を消しているが、こうした多額の奉加も獅子舞の人気の衰えれば期待できなくなり、姿を消すひとつの要因になったと考えられる。

(表1) 奉加帳にある差し入れ金などの合計

白米	1斗6升
銀	16匁7分5厘
金	3分1朱
札(銀)	65匁
札(金)	2朱
青銅	50疋
ひいきより貰い分	金1分 銭700文 銀8匁
六日稽古仕候	金五両一分
振舞(酒)	二回

7 阿久比町域の獅子舞

阿久比町域の獅子舞について、『阿久比町誌 資料編三』「第二節 獅子館」の項でふれられている。それによれば、獅子館が保存されている地区には、獅子舞が行われたことを推定しているが、おそらくその通りであろう。「獅子館」は、その元が獅子舞の道具を入れて持ち

歩くことにあることを考えれば、その発展形態である「豪華な獅子館」があるということは、元をたどれば、獅子舞にたどりつくといえよう。獅子館を保存している地区は、坂部(村)・矢口(村)である。おそらく、この地区には、かつては獅子舞が行われていたであろう。

板山(村)地区と草木(村)地区と植(村)地区には、獅子頭が残されていたり、わずかだが史料の残されたりしている地区もあることなどから、獅子舞が行われていたことを推定している。この推定も首肯できるものである。

8 常滑市域の獅子舞

常滑市域の獅子舞について、『常滑市誌』「第三章 第七節 民族芸能」に「獅子舞」の項目がある。それには「古場に伝わっていた獅子舞がいつごろから舞いはじめたかは不明である。ただ土地の古老によれば、すでに明治の中ごろには舞われていたという。祭礼の時(古場の神明社・区長の家・青年団の家)、神迎えの時(神明社)、厄祓い(厄歳元方の家)、秋葉さんの時(秋葉社)などである。舞は二人舞であり、一人は獅子頭、一人は幕持ちを務める。祭礼のときはハッピを着るが、他の場合には普通の服装で行った。獅子方は笛が四、五人で大太鼓・小太鼓は合わせて一人でうけもった。」とある。この文の後に舞の説明などが書かれている。古場(村)の獅子舞は、現在も行われており、地域の人たちに披露されている。

他にも、小鈴谷(村)と広目(村)にも獅子舞があり、神社の祭りで奉納されている。常滑市域にも姿を消した獅子舞があると思われるが、今回は見つけれなかった。今後とも史料の発掘に努めていきたい。

9 武豊町域の獅子舞

武豊町域の獅子舞については、『武豊町誌 本文編』「第一章 神社と寺院 第一節 神事行事」に、尾陽村々祭礼集(宝暦五年亥八月)の史料として、次のように載せている。

知多郡 長尾村

一、天王祭山車一輛・人形せうき魔ふり一人・獅子頭・のぼり四本車付、村中より社迄引渡、祭日六月十五日、右社同村弥宜武右衛門支配



『張州雑誌』「師崎村 祭礼練物」より

(図5) 神幸祭の行列中の獅子(部分)

長尾村の天王祭に「獅子頭」が登場している。この「獅子頭」は山車などと共に村中より社(武雄神社)まで引き渡るのであるから、おそらく何らかの所作を行いながら渡御したと考えられる。しかし、後に獅子舞に発展したという記録はないので、獅子頭を奉納しただけかもしれない。

10 南知多町の獅子舞

『張州雑誌』や『尾張名所図会』の師崎村の項に、羽豆神社の神幸祭の行列の中に二頭の獅子が描かれている。『張州雑誌』に描かれた一頭の獅子は、大きく天を仰いでいるので、道中に獅子らしい所作を行っていることが分かる。しかし、この村で獅子舞に発展することはなく、行列の中のひとつの役割を果たしていたといえよう。(図5)

おわりに

知多地方の消えていった数多くの獅子舞をできる限り明らかにした。知多地方では、江戸時代の終わり頃には、数多くの村で獅子舞が盛んに行われていた。盛んになった理由をまとめると、次のようになる。

獅子舞は、ほとんどが神社の神事と結びつき、祭礼のうちに奉納されている。獅子舞は、悪魔修祓の舞ともいわれ、穢れを祓うという信仰が村の人たちの広い支持を得た。

獅子舞は、伊勢大神楽の影響を受けており、舞が曲芸的な動きや躍動感のある動きを取り入れ、娯楽的要素を高め、村の人たちが観て楽しむことができた。

「嫁獅子」系の獅子舞は、歌舞伎などから題材をとった「段もの」を演じるようになった。当時、歌舞伎に題材をとった演芸は人気があり、村芝居や山車の中で演じられていた。この流れの中で、「嫁獅子」の演じる舞が村の人たちを引き付けることとなった。

獅子舞は、「獅子を舞う人」「太鼓を打つ人」「笛を吹く人」など、総合演劇的な要素ももっている。それだけに、演技を高めようとするどこまでも追求できる。演技に対して観照眼をもった観客に対しても魅力をもった舞を演じることができた。

獅子舞を伝承する主体が、村の「若い衆」となっており、祭の主体も村の「若い衆」であるので、伝承する主体と組織ができあがっていた。とくに、祭に対しては、村の保護があり、獅子舞にかかる費用なども受けることができた。

このようなことが、獅子舞が盛んとなった理由である。では、これほど盛んであった獅子舞が姿を消していった理由は何であろうか。これは推定して次のようにまとめた。

明治に入り、科学的な考え方が取り入れられるようになり、獅子舞がもっていた悪魔修祓の舞という信仰がうすらいでいった。雨乞いの行事に獅子舞を行うことなどは、影をひそめていった。



(図6) 愛知県指定無形文化財 朝倉の梯子獅子



(図7) 愛知県指定無形文化財 朝倉の梯子獅子

村の人たちの娯楽が多様化して、村の「若い衆」の獅子舞を伝承しようとする意欲がうすらいでいった。

祭が獅子舞よりも山車を引くことや屋形を担ぐことに楽しさを見出し、力を入れるようになった。

演劇の世界も、歌舞伎のもっていた圧倒的な影響力がうすらぎ、「嫁獅子」が演じる「段もの」の魅力が若者を引き付けなくなり伝承の意欲が衰えた。

獅子舞を保護していた村も、獅子舞の魅力が少なくなると費用などの保護を止めるようになり、維持が困難になった。

このような理由から数多くの獅子舞が姿を消していったのであろう。それでも、今日残っている獅子舞も多い。なかには、無形文化財などに指定され、手厚い保護が加えられている獅子舞もある。伝統文化を絶やさないためにも、多くの人たちが獅子舞を知り、観て楽しんでほしいと思う。(図6・7)

註

- (1) 獅子舞が姿を消したことが分かる直接の史料は、管見の範囲では見つけられなかった。そこで、消えた理由は「推定」するに留めた。
- (2) 寺本四力村は、中島村・廻間村・堀之内村・平井村である。
- (3) 文書の中の「より」は、古文書の中では「方」と記されている。(以下同)